

## 2023 年度口語詩句賞総評 龍 秀美

今年は一次選から三次まで順を追って選考を進めました。今年の傾向として、候補作品 10 篇がひとまとまりになった時の効果を感じました。短歌や俳句の世界では、30 作や 50 作を連作として見るという既に確立された方法があるようですが、口語詩句ではどうでしょうか。10 篇がまとまった時に作者の人格のようなものが滲み出るのではないかと期待して臨みました。

まず一次選では数にこだわらず、優れていると思う作品をランダムに取り出しました。心がけたのは、たとえ一作でも飛びぬけた個性があれば採るということです。その結果 37 候補から 25 作が残りました。

二次選におけるわたくしの選考基準としては

- ・優秀作が安定した数であること
- ・独自のものの見方・捉え方があること

の二つに重きを置きました。ここまで残った作品は当然どれも甲乙つけがたいのですが、選択するとなれば競争に勝てる力と個性を採らねばなりません。特に今年判断に迷ったことは昨年までに比べて定型スタイル、つまり俳句、短歌等の伝統詩形の作品の優秀さが際立ってきたことです。昨年までの実験的な風潮が弱まってきたというか疲れが出てきたのではないかとも思われました。わたくしが例年心がけることのひとつは「口語詩句」であるかどうか、一連の作品が短歌、俳句等の単一ジャンルの伝統的な力に頼りすぎていなかということです。その観点から見て、大変うまい作品であっても退けたものがありました。

その結果、特に俳句のスタイルをとるものに消極的になってしまった部分があり、その判断が正しかったかどうかは疑問が残るところです。日本語の短詩形の代表である俳句の持つ伝統の厚みと力を改めて感じました。このような中、二次選で 25 作から 15 作が残りました。

今年は事務局から最終的に 10 篇を選んでほしいとの要望があり、三次選として 10 作品を残しました。ここでの基準は

- ・口語詩句であるか
  - ・普遍性があるか
  - ・今後の短詩形の方向を示す上で優れて示唆される作品があるかどうか
- に置きました。

以下、入選作で印象深かったものを記してみます。

<吉沢美香>

今朝の冬半透明の黄の付箋

——自然と人間、季節と人工の対照の妙を都会的に表現している。

<大嶋碧月>

君が美しく叫ぶための世界が

永久に糞っ垂れでありますように

——男性の性を強い即物性で捉えており、歴史認識にも通じるものがある。

<中矢温>

来世あるはず心に象を住まわせて

——伝統的俳句の象徴性や比喩の良い部分を備えている。

<中原絃>

テラリウム返事をしてよ

テラリウム

優しく政治を教えたげるよ

——事物と現実社会との交流や融合を体温でとらえる。

<立花ばとん>

つかれて何もできない

手を近づけて手を大きくする

——物事のかたち・姿を見る目の冷静さ。

<田崎義太>

牡蠣割っていのち啜るか一休忌

(文明13年11月21日没)

——「忌」にモチーフを絞った作品群。集まると面白い。

<紅好人>

御茶碗に

ワインを注ぐなど

犬吠える

——柔軟な反骨精神とそれを支えるユーモア。

<山本先生>

あ、

それは

わたしのトマトわたしのトマト

——語の上澄み部分に潜むユーモアを俊敏に掬い取る。

<桜望子>

私性の不在に打つ四拍子

——表現に対する冷静な批判を造形する力。

<あお>

もう会えない

人がいるっていいことよ、と

祖母は巨峰を剥きながら言う

——人間が生きる意味と可能性を深く感じ取っている。

<李いう子>

丁寧に軍手を干して海女の午後

——動作とその結果出現するおもしろさを発見したようだ。